

## 1 漢字と仮名の歴史

### 書体の発生と変遷

伝承によると、漢字は黃帝の史官であった蒼頡(そうけい)が鳥や獸の足跡から発明したというが、現在確認できる最古の漢字は、殷(商)の晚期（前一四世紀～前一二世紀頃）にト占の結果を龜甲や獸骨に記した甲骨文字である。甲骨文字は二〇世紀初頭に、殷墟（現在の河南省安陽県）で発見された。

周（前一〇二〇頃～前二五六）では祭祀のために青銅器が盛んに作られ、それらには銘文が鋳込まれた。これを鐘鼎文、もしくは金文という。甲骨文字や金文は文字が刻された素材による名称である。

初めて中国を統一した秦（前二二一～前二〇二）の始皇帝は、李斯(り)しに命じて、それまで煩雑だった文字を簡潔な文字に統一した。これはやや縦長で、ほぼ均等な太さの直線と曲線を組み合わせた文字で、小篆(しょうせん)（秦篆）という。これに対し、小篆に統一する以前から公的に使用されていた文字は、周の史籀(しづう)が定めたといわれ、これを籀文という。また、小篆の統一以前に

私的な異体字として使用されていたものを古文という。これら籀文や古文を含む小篆以前の文字を総称して大篆とよぶ。この大篆と小篆とを合わせて篆書という。

秦は小篆を標準書体としたが、実用面ではすこにもつと簡潔で書き易い、直線を多用した隸書が書かれていた。これを特に秦隸とよぶ。その後、前漢（前二〇二～九）から新（元）二十五を経て後漢（五～二三〇）のはじめまでの隸書を古隸といい、後漢に入つて、毛筆による装飾性が現れるようになり、特に横画や右払いの終筆をことさらに強調した波磔(はく)を持つ横広の隸書が完成した。これを八分(はっへん)といいう。篆書とくらべて簡素で実用に適した隸書は、漢時代に完成して盛んに用いられ、字形そのものも今日の楷書にかなり近くなる。これが「漢字」と呼ばれるゆえんでもある。

前漢には章草（草隸）とよばれる速書きの簡略な書体が現れ、これは後漢末から三国時代（二二〇～二六五）にかけて草書へと発達していく。また隸書を簡略化して速書きすることで行書が生まれた。ともに筆の運びを単純にして楽に書けるよう、实用に即して発達したものである。また少し遅れて、八分の波磔や独特なトメ・ハネを抑制して、隸書よりもさらに簡潔な楷書が発生した。これらの三書体は後漢の中期には成立し、東晋の王羲之（三〇七～三六五）が、それぞれの典型を示した。王羲之の書はその後、現在に至るまで三書体の標準として支持され、そのため王羲之は「書聖」と称されている。